

# 童話を作りたかった

## 『私とネコたちの物語』

武知 明子さん

取材・レポート『めづるべし』研究会 編集部

撮影(P02)：小森 由美子

ふり返ると……私の人生のパートナーはネコです。  
でも、今ではみんな天国に行ってしまいました。  
天国で私を待っていることでしょう。  
おみやげはかつお節？ にぼし？ エビ！ マタタビ！ だよね。  
ニャンでもみんな持ってゆくよ。パーティしようね！ 待っていてね。  
――『呪文を忘れたネコ』あとがきより――



「私、中学の頃から小さいお話を書いては親友に見せていたの。お話ができると読みたいから送って、と言われて送ったお話は面白いからって、返ってこなかったけれど……。」と遠い日の思い出を懐かしそうに話す武知さん。少女時代は作家になることが夢でした。

昭和15年、東京の芝、増上寺のおひざ元で生を受けた自称「信州育ちの江戸っ子」です。お母様と人力車に揺られて新橋演舞場までお芝居を観に行った記憶も。大事な一人娘でした。東京大空襲の1年前に、浜松町一帯が防災のため強制疎開となり、信州へ。東京の家は壊され、終戦後もそのまま信州に定住、佐久小諸(長野県)で育ちました。「どこかに都会っ子の匂いが残っていたのですね。男の子たちからは白粉臭いつて、それは苛められました。」そのおかげで!? 今の負けん気の強い自分があるとも。『負けたくない!』を何よりの原動力として、〈人生〉を切り開いてきました。

「〈人生〉に欠かせないもの? それ

はネコ! 何といってもネコ! です

ね。今は、ペット禁止のマンションです

から。娘や友人がせつせとネコグッズを買ってきてくれて、この通り(笑)。」

10年前、夫の闘病生活を機に、医師の娘がいる川崎市を「終の棲家」に選びました。リビング脇の和室には、やさしい笑顔の遺影が置かれています。

武知 明子 たけち あきこ

「すみ ゆかこ」のペンネームで創作中。1940年2月29日生まれ(79歳)のため、誕生日はオリンピックと同じ4年に1回で現在19歳!? 1965年に結婚、夫の会社経営の片腕として現場で働きながら、娘、息子を育てる。夫亡き後も仕事を継続。お琴は師範級。今も「佐久三曲協会」で後進の指導を続ける。神奈川県川崎市在住。



15歳から奏でているお琴。現在お弟子さんは10人。新幹線で佐久の家に帰り、指導を続けている。「音楽とは音を楽しむもの。音に苦しむなら音楽にならない。」とお稽古も楽しみながら。



お盆休みにシンガポールへ。車イスでの海外旅行には、飛行時間が短かく、足元の冷えない温暖な気候の国が嬉しい。